

## 国会会議録にみられる〈ら入れ言葉〉の使用実態について

浅川哲也

発表者は、浅川哲也 (2017) 「ら抜き言葉と〈れるる言葉〉の拡大—日本語母語話者の〈誤用〉問題—」(『文学・語学』第 221 号)、および、浅川哲也 (2018) 「〈ら入れ言葉〉の使用実態とら抜き言葉との関係について—永遠に見られる・名前では呼ばれる・さらっと食べられる—」(『言語の研究』第 4 号) において、五段活用動詞未然形・可能動詞に「られる」が接続したり、非五段活用動詞未然形に「らられる・られられる」が接続したりするなど、形態的に「ら」が過剰に使用されているように見える、規範的な文法から逸脱した用法を一括して〈ら入れ言葉〉という名称を付した。本発表は、『国会会議録検索システム』(以下、『国会会議録』) を用いて、『国会会議録』上での〈ら入れ言葉〉の使用実態を明らかにし、〈ら入れ言葉〉の発生についての形態的な要因について考察することを目的とする。

『国会会議録』は、昭和 22 年 (1947 年) から現在まで約 70 年間にわたる資料の蓄積があり、比較的改まった場面での話し言葉が使用されていると考えられる。〈ら入れ言葉〉について、『国会会議録』を資料として調査したところ、昭和 22 年 (1947 年) の第 1 回国会の時期から〈ら入れ言葉〉が使用されていることが確認された。また、『国会会議録』の〈ら入れ言葉〉はすべての動詞の活用の種類にその例があり、受身・可能・尊敬の意味用法で使用されている。

『国会会議録』では、1950 年代の〈ら入れ言葉〉の使用数が最も多い。1950 年代の五段活用動詞の〈ら入れ言葉〉が、改まった場面における規範的なア段型未然形への助動詞「れる・られる」の過剰な接続ではないかとみられるのに対し、2000 年代の〈ら入れ言葉〉はエ段型未然形への助動詞「れる・られる」の過剰な接続であるという傾向がみられる。現代日本語において動詞未然形に助動詞「れる・られる」が過剰に接続する形態を動詞の活用の種類別に整理してみると、その形態は〈ら入れ言葉〉にとどまらず、〈れるる言葉〉などの多岐にわたり、規範的な文法からかけ離れたものとなっている。